

「知らされた奥義」

エペソ人への手紙 3 : 3 - 7

October.9.2022

エペソ人への手紙 3 : 3 - 7 (パウロ)

Preface

もう一度 3 節をお読みします。

エペソ人への手紙 3 : 3 (パウロ)

イスラエル民族至上主義者のように生きていた使徒パウロに、神の奥義が啓示によって示されました。

ここで「奥義」と訳されている言葉は、ミュステリオンというギリシャ語で、英語のミステリーの語源となった言葉です。

つまり、ここで言う奥義とは、「秘密」、または「隠されていたこと」を意味します。

そして、その秘密・隠されていたことが啓示によって知らされたと言いますが、啓示と訳されているギリシャ語アポカリュプシスは、「ベールを取る」とか、「隠れていたものが露わになる」という意味の言葉です。

ですから、「奥義が啓示によって知らされた」とは、「それまで隠されていた秘密が明らかにされた」ということです。

じゃあ、どんな秘密なのか？

4 節を見てもみますと、「キリストの奥義」と出てきます。

つまり、キリストに関する秘密です。

では、どういう秘密なのか？

エペソ人への手紙 1 : 9 - 10 (パウロ)

キリストの奥義とは、キリストにあって、天地万物、私たちの目に見えるもの、目に見えないもの、もうすでに知られているもの、まだ知られていないもの、ありとあらゆる一切合切が、キリストにあって集められ、一つとされるというのが、それまで隠されていた神の秘密であり、キリストにある奥義です。

Part One

ここで言う、一つに集められるというのは、散り散りになっている粘土の破片をかき集めて、「えいっ、えいっ」と力づくで、無理矢理大きな粘土の玉を作るように、または、粗大ごみを大きな機械を用いてもものすごい力でプレスして、元

の原型が何なのか良く分からない四角い塊として出てくるようなものではありません。

「キリストにあって一つに集められる」とは、ハーモニーです。

調和です。

互いが互いを傷つけ合ったり、いがみ合ったり、奪い合ったり、特定の利益を上げるために致し方ない犠牲や淘汰を伴わせたり、誰かの主張を通すために誰かの思いや良心が踏みにじられたり、自然の秩序においても人間の営みにおいても、必ずや一定の強者がいて弱者がいるような現存する今の世界のようにではなく、

神の手によって造られしすべてのものが、互いの存在を喜び、誰かのために誰かが、または何かのために何かが必要に消費されたり消されたりするようなことのない世界、状態、これがキリストにあって、一つに集められるということです。

そして、このキリストにあって一つに集められる中で、最も大変で、最も重要なキーポイントとなるのが、私たち人間の存在です。

ペットを飼ったり、植物を育てたりしたことのある方の中には、「人間なんかよりも、よっぽどこの獣や言葉を発しない植物の方が、創造主なる神様のことをよく知っているのではないだろうか」と感じたことのある方もいると思いますが、私も大学生の頃飼っていた猫に餌をあげる時、突然、「この猫の方が、僕なんかよりも、はるか以前から天地万物をお造りになった神様のことをよく知っているんじゃないだろうか」と感じたことがあります。

そういう観点から聖書を見てみますと、「空の鳥を見なさい。種蒔きもせず、刈り入れもせず、倉に納めることもしません。それでも、天の父なる神様は彼らを養ってくださいます」と、イエス様が仰った箇所が目に入ってきます。

つまり、人間以外の被造物は、神のことを知っているということです。

でも人間は、神を知らないし、知ろうともしない。

いや、本当は神というお方がいるならば、誰もが本能的に本当の神を知りたいと思っている。

その人間の本能的な思いに、神が応えて下さったのが、イエス・キリストの存在であると聖書は私たちに語り掛けて下さいます。

でもそのことが、私たちの力では中々受け入れることが出来ないために、神様は、私たちを一番のターゲットに定めてご自身の思いを明かし続けて下さいます。

Part Two

人は、唯一神のかたちに造られた他のどの被造物とも一線を画す尊い存在と

して造られたにもかかわらず、そんな自覚もなく、神によって造られし存在であるということも忘れてしまい、自らが神になりたいという罪なる欲求に翻弄されながら生きています。

そして私たち人間は、神を知るところか、誰もが「神になりたいけれども神になれない」という怒りを心の内に秘めながら、物事思い通りに行かないということに腹を立てています。

物事思い通りに行くように出来るのは神のみですが、人はあたかも、そんなことは知らないかのように、誰もが物事思い通りに行くことを願って、これまでの歩みを重ねてきました。

つい最近、ロボットがこれから社会の中にもっとたくさん出て来るだろうということをテーマにした新聞の読者投稿欄で、二つの記事を見ました。

一つは、「会社の同僚の多くがロボットに代わったら、神経すり減らすことも減り、どれほどいいだろうか。でも、そんな自分がロボットに取って代わられないようにしたい」というような文章でした。

そして、もう一つは、「ロボット犬を一定期間所有してみたら、始めはつまらなかつたけれども、段々と感情移入できるようになって、かわいく思えてきた」というような投稿文でした。

これらの文章を読んだ直後には、「う～ん、何かすつきりしないなあ」という釈然としない思いしか湧いて来なかつたのですが、少し時間が経って、聖書を読んだり、自分のことを考えたりしているうちに、「ああ、これは大変なことかもしれない!」と思わされました。

何がどう大変なのかと言いますと、「結局、人がロボットを作りたいという思いを掘り下げていくと、『神になりたい』という思いに行き着くのもかもしれない」と思ったからです。

人間の怒りの原因は、物事思い通りに行かないことに由来すると先ほど話しました、ロボットというのは、人間の思い通りに動いてくれる疑似人間であり、その疑似人間を通して、寸分違わず願ったとおりに物事の結果を出してくれると気持ちがいいという支配欲の満たしの表れではないだろうかと感じてしまいました。

そんなことを考えながら、私自身の怒りの原因は何だろうかと考えてみますと、これまたやっぱり、思い通りに行かない物事だったり人間模様だったりすることだと気付かされました。

例えば、我が家に子供が生まれて来て、「こんなに素敵な命、こんなに美しい存在、こんなに爽やかな思いを与えてくれる存在があるのだろうか。男と女がひ

とつになって、こんなにも素晴らしい命が誕生するなんて、これこそ奇跡だし、この命の誕生を見ても、神を知らないなんていうこと自体、もうそれ自体が、人間は罪人であることの証拠だ」と思いましたが、退院して家に帰ってきた直後から、思い通りに行かない赤ん坊、また成長していく子供たちにどれほど怒ってきたことか、ただただ子供たちに申し訳ないだけですが、申し訳ない気持ちも冷めやらぬ内に、また怒っていたりする自分がいます。

寝ていて欲しい時に泣き叫び、ジッとしていて欲しい時に飛び跳ね、もっと楽しそうにして欲しい時に無反応で、真剣であって欲しい時にさぼり、もっと気を楽しませて欲しい時に気を張り、子供が全然全く自分の思い通りに行かないことに腹を立て、怒っている自分勝手な私自身を発見します。

Part Three

また、思い通りに行かないという事を考えながら聖書を見てみますと、神様やイエス様の話の中には、土とか、水とか、木とか、動物とか、作物とか、天然世界の話、特にたくさん出て来るのが農業の話であることを発見します。

農業の話、つまり、土と水と空気と太陽光の話です。

私たち人間、食べるためには農業をしなければなりません、小さな家庭菜園から端の見えないとてつもなく大きな土地での大規模農業に至るまで、いざ作物を作ってみようと思つと、すぐに気が付きます。何を？

思い通りに行かないということですね。

この思い通りに行かないということが、サタンに「お前、神のようになれるぞ」と誘惑され、まんまとその誘惑にハマった私たち人間にとっては、この上ない悔しさと怒りを沸き立たせることとなります。

「ならば、出来る限り思い通りに行くようにしよう」と、人間の手で、人間の思い通りに動いてくれるものを生み出し、出来る限り人間の思い通りに、土や水や空気や太陽光を動かし支配しよう、たとえその過程において、天然世界が破壊されようが、淘汰されようが、思い通りにエネルギーを作り出し、思い通りに食べ物を作り出し、人間の思い通りに世の中動かしてみようと思つてやってきましたが、その思い通りになるということが積もり積もって、全くもって思い通りに行くことはないという事を、今知らされています。

それでもまだ、人は、思い通りに出来ると、思い通りに出来ないことへの怒りを覚えながら、世の中回そうとしています。

だから、イエス様も父なる神様も、土と水と空気と太陽光の話をされながら、「思い通りに行かないことを素直に認めて、遜りなさい」と、思い通りに行かないすべての事柄を、唯一思い通りにそのすべてを営み、ご支配されている神の存

在を認めるようにと、私たちの周りに、思い通りに行かない土と水と空気と太陽光をお与えくださっていることに気付かされます。

ちょっと話が反れますが、作物を作るためには地を耕すことは基本だと長い間教えられてきましたが、最近では、不耕起栽培なる土地を耕さない農法こそ、自然環境にもいいし、収穫量も安定し、循環型持続可能な農法であって、結局のところ、人間が思い通りにしようとしてありとあらゆる方法で天然世界に手を施してきたことが、自らの首を絞めることになっていると、自然科学の世界でも言われたりもしているようです。

この神のご支配の中にある天然世界の営みを認めようとせず、遜ろうとせず、むしろ怒りを抱いているイスラエルの民たちに、そして広くは、私たちすべての人間に神様が語り掛ける聖書の言葉を一箇所見てみたいと思います。

アモス書4：6－13（パワポ）

今、私たち人間に求められていることは、神に会う備えをすることです。

神様は私たち人類に、人は神でもなければ神にもなれない、人間の思い通りに行かないという神に対する遜りの気持ちを覚えさせるために、欠乏を送り、雨をとどまらせ、作物が実らないようにし、疫病を送り、戦争を人が引き起こすことを許され、町々を覆されましたが、それでも人は、自らの思いや決断で、神のもとへと帰っていくことはしませんでした。

「それでも、あなたがたは、わたしのもとに帰ってこなかった」と何度も出てきます。

だから、神自ら、人の方へとやって参りました。

それが、イエス・キリストです。

イエス・キリストを信じることが、神に会う備えであり、唯一の道であり、救いであり、真理だと聖書は教えてくれます。

さらに、神に対する遜りの気持ちがないということは、人に対しても遜りの気持ちを持ってなくなります。

遜るどころか、むしろ、自分に対して他者を遜らせようとしてしまいます。

自分が神となって君臨し、思い通りに事を運ばせるために、人を掌握したいと思ってしまう。

ただ、先程も話しましたように他者を遜らせることほど思い通りに行かないこともなければ、怒りが湧いてくることもありません。

だからその結果、怒りに身を任せ、争いを起こします。

もし、その怒りをぶつけることが出来ないような時や相手には、その怒りの矛

先を自分自身に向けて、その怒りを自分の内に貯めこみながら、精神的に病んでしまうこともあります。

結局のところ、人への憎しみや怒りは、憎んでいる対象の問題というよりも、究極のところ、自分と神様との関係が成っていないということに行き当たってしまいます。

聖書は、イエス・キリストが私たちに神へと導き、神との和解へと導きなされる牧者であり、平和の君なるお方だと言いますが、平和の君であられ、和解の成就者であられるイエス・キリストとの関係こそが、人に対する憎しみの度合いに直接関係してきます。

Part Four

説教の冒頭で、使徒パウロは、イスラエル民族至上主義者のように生きていたとお話ししましたが、その生き方の原動力は怒りでした。

先週のオープン礼拝で、ケニヤ宣教師の市橋隆雄先生がお話しして下さいましたが、その説教の中で、どの国の、どの民族の、どの文化がより優れていて素晴らしいのかと言っていることほどの外れなことはないというようなことを仰って下さいましたが、かつての使徒パウロは、自らの民族の文化や宗教や民族性の優越性を主張しながらそれを信じ込んでいました。

民族の優越性を保つことこそ信仰であり、その優越性を脅かす人々に対しては剣を取ることも厭わないと怒りを燃えたぎらせながら、イスラエル民族至上主義にそぐわない者たちを蹴散らそうと躍起になっていました。

そんなパウロに、主なる神様は、ただただ包み込むような一方的な恵みをもって、キリストの奥義を示して下さいました。

どんな奥義ですか？

キリストにあってすべてのものが一つに集められるという究極の調和、和解がなされるという奥義です。

そして、その奥義のど真ん中に、私たちキリストによって贖われた者たちを神の豊かな恵みによって、どんと据えるという秘密を知らされました。

どうやって知らされたかと言いますと、

エペソ人への手紙 3 : 5 (パウロ)

御霊によってです。 御霊によって知らされました。

先ほども言いましたように、私たち人間の力では到底、キリストにあって一つ

に集められるという神の奥義を受け入れることは出来ません。

なので、父なる神は実際にキリストを送り、キリストが天に上げられてからは、私たちの内にお住まいになって下さる聖霊によって、この奥義を理解し受け入れる祝福へと導いて下さいました。

だから、神が示してくださった奥義を知りたいと思ったならば、祈るんです。

その奥義の奥深さ、恵み深さ、偉大さ、物凄さを実感し、そのために生きたいと願うならば、「聖霊を下さい」と祈らなければならないですね。

2000年前イエス様は、確かに、「聖霊を下さる」と仰いました。

「あなたがたは悪い者ではあったとしても、自分の子供に悪いものをあげようとは思いません。それならなおのこと、天の父なる神様が、あなた方に良いものを下さらないことがあるのでしょうか。求める者には、聖霊をお与えくださいます」と、仰いました。

そして、聖霊を与えられた者たちは、キリストの奥義を知らされるんです。

Part Five

聖霊によって、やがて天にあるもの、地にあるもの、一切のものが、キリストにあって一つに集められるという神の奥義を知らされたパウロは、もう一つとても大切なことを悟らされました。

それは、ありとあらゆるものの中にある敵意が廃棄され、怒りという怒りが排除されるという事をです。

以前のパウロは、自分の怒りを正当化し、イスラエル以外の人々を犬にも劣る異邦人だと見なしながら、神のご計画の中には一切眼中にもない霊的価値のない存在だと思い込んでいました。

そして、そのような信念こそが、聖なる信仰であると真剣に思っていました。

ある意味、物事思い通りに行かないという人間誰もが持つ怒りを、信仰と言う名の元、はけ口にしていたようなことかもしれません。

ところがこんなパウロが、イエス・キリストに出会い、御霊によって、すべてがキリストにあって一つに集められる究極の調和という奥義が知られますと、物事自分の思い通りに行かそうとすることの野蛮さ、残忍さ、罪深さを悟られます。

また、思い通りにとり怒りを抱いていることこそが、まことの神を認めない偶像崇拜であり、破壊でしかないことを悟ります。

誰もが人は、一人残らず、この神の奥義に入れられる可能性を秘めており、キリストをかしらとした体に連なる祝福に与ることが出来ます。

そして、パウロはこの福音を一人でも多くの人々に語り継ぐために、仕える者とされました。

エペソ人への手紙 3 : 6 - 7 (パウロ)

この福音に仕えるように召されているのは、パウロだけでなく、私たちもそうですよね。

Conclusion

今、私たちが生きているこの世界が喘いでいる最も大きな問題こそ、互いに赦し合えないということです。

そして赦し合えないから、相手を思い通りに動かそうとし、思い通りに動いてくれないから、また怒りを抱き、その怒りを正当化し、聖なるものと見なして、自分が神になろうともがきます。

でも、そのもがきには、救いはありません。

救いは、イエス・キリストによって、一つに集められるという神のご計画、神の奥義にのみあります。

エペソ書は、私たちキリスト者の群れを教会だとも教えてくれますが、それと同時に私たち一人一人が教会だとも教えてくれますが、

私たちキリスト者という教会は、キリストにあって一つに集められるという神の奥義を知っている者たちです。

そして、ただ知っているだけでなく、その知っていることを、今この世界、この調和のない世界にあって、やがて来るキリストにある究極の調和の前触れを体現するように期待されている者たちでもあります。

だからと言って、嫌々するものではありません。

甘くておいしいアイスクリームを頬張って嬉しくなるように、そこに喜びがあることを知っているからこそ、キリストの霊に促されて、その促しに応えようと体現していくのです。

使徒パウロは、この喜びを知っていました。

だから耐え、だから待ち望み、だから仕えました。

私たちには、耐え、待ち望み、仕えることの出来る究極の根拠があります。キリストにあって、一つに集められるという根拠です。

この究極の根拠のための今日という日であり、今日という時であり、キリスト

にあって一つになる事の体現を目指すことができます。
最後に、ヨハネの福音書を見てみましょう。

ヨハネの福音書 13 : 34 - 35 (パワポ)

お祈りいたします。

祝祷：ヨハネの福音書 13 : 35